
泉番のウンディーネ。

黒井蒼那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泉番のウンディーネ。

【Nコード】

N6538N

【作者名】

黒井蒼那

【あらすじ】

水の精霊「ウンディーネ」のティアは、泉番の女の子。彼女は泉を利用するために立ち寄る冒険者達と触れ合うことで、ある人を探しているのです。回復の泉を舞台に繰り広げられるアクア×ファンタジー。

はじまり。(前書き)

ども黒井蒼那です。

開幕しましたウンディーネのティアの物語。

どこまで続けられるのか、展開がどうなるのか微妙ですが、よろしく願います。

はじまり。

「本当に「泉番」になるというのかい？」

「はい。おかあさま」

誓いにも似た心持ちだった。おかあさまはゆっくりと頷いた。でもその顔の曇りは晴れなかった。

「ここに残ってもいいんだよ？ 確かにお前には、泉番となったウンディーネの話をたくさん聞かせてきた。だけど……」

「別におかあさまのせいじゃありません。私は、自分の意志で泉番になりたいんですっ！」

「分かったよ。辛かったらいつでも戻ってくるんだよ？」

「ありがとうございます。では、私は行きますね」

おかあさまは嬉しそうに微笑むと、一族のみんなが手を叩いて喜んでくれた。

その晩、私は、一族でも仲の良い人達のみの見送りを受け、未知の水路へと泳ぎだした。

精霊・・・それはこの世界に古から住んでいた者たち。彼等は水を、風を、火を、そして土の助けを借りて、人間の手助けをする。

しかしそれにはいくつかルールがありました。破ってはいけない
掟も。

森の泉番。（前書き）

ども黒井蒼那です。

アクアファンタジーとは言いましたが、どうなるか作者にもわかりません。

それではよろしく願います。

森の泉番。

男は、水から口を離すと、ほう、と息を吐きました。傷がみるみる塞がり、顔に活気が満ちた。

冒険者の格好の男は幹に立て掛けていた片手剣を手にとると、足取り軽く戻っていった。

今日であの人を見たのは5回目。一体いつまで続けるのだろう。

私は待ち続ける。あの人が無事この「回復の泉」に戻ってこれるようにと祈って。

「ティア、キョウモ、ミズキレイ」

「ふふつ、ありがとうございます」

この透き通るような青色の子たちは私の眷属のピュイ。みんな私の仕事を手伝ってくれている大切な仲間です。

「ティア、スコシ、ヤスム？」

「まだまだ、頑張りましょうっ。ウンディーネとして頑張らないとっ」

私はティア。水の精霊「ウンディーネ」のティア・リーフィス。今、一人前の「泉番」を目指して修行中です。

泉番とは洞窟や樹海に湧いている「回復の泉」のお手入れをする仕事です。

遠くでさっきの男の人が魔物の群れと戦っているようです。魔物との戦いで疲れたら、またここに来て、傷を癒やすのでしょうか。私

達泉番は、そんな方の手助けをしています。

木々の合間を縫って風が吹いてくる。きっとこの風は遠く北の「風車山脈」から吹いてくるのでしょう。こんな西の森まで吹いてきたようです。

ここは世界の西にあるオースリア王国の辺境にある森「青い花の森」。オークの集落あり、ワームの巣がありで、修行したい戦士の方々が時々いらっしやいます。

泉が汚れてないか、私は泉の縁に座り、泉の水を覗き込む。

水は透き通り、底ではピュイ達が戯れている。

この泉の水は水の精霊の里、最も清浄な気が満ちる場所から地下を通ってきます。そんな泉の管理をするのも私の仕事です。

泉の水から目を離すとウサギが一匹とてとてと寄ってきて、私のそばで水を飲み始めた。

小さな喉をごくごくと鳴らし水を飲む。するとこちらに気づいたのか、つぶらな瞳をこちらに向けた。

大丈夫ですよ？ 大丈夫。そう自分に言い聞かせて私はウサギをそっと抱いた。野生であることがよく分かるザラザラとした毛並み。でもとても暖い。

もちろんウンディーネの体は水で出来ているので、温度を感じることはできません。それでもその小さな体は、温もりに満ちていました。

精霊達に伝わる鉄の掟。

精霊は生き物の手助けをすることが出来る。だが、決してその姿を見せるはいけない。

小川のほとり。

「あの……大丈夫ですか？」

「……………ぐっ」

「ふえっ！？……まだ、生きている……」

「む……だ、誰だ？……」

「わ、私は、えっと……」

心地よい川のせせらぎの中、名も分からない戦士と出会った記憶。それは宝石のように、私の中に残っている。

眠ってしまったのでしょうか。

太陽は傾き、西の地平線に沈もうとしている。放射線状に広がるその光は綺麗に赤みを帯びて輝く。

……夜になってしまう。

「青い花の森」は夜になると霧が立ちこめ、夜行性のオウル系モンスターが現れます。

オウル系のモンスターは攻撃力こそ高くありませんが、素早く、また夜でも獲物の姿を捉えることができてしまう。

……心配になってきました。

私はあの戦士に気づかれないように、岩陰から周囲の様子を窺う。どこかで剣戟の打ち鳴る音が聞こえる。戦士は未だ健闘中のです。

しかし、次第にその音は少なく、そして鈍くなっていきます。そ

れは魔物たちの雄叫びに塗りつぶされていき、掻き消えそうです。

このままでは死んでしまう。

「ピュイさん達、しばらく留守を頼みます」

ピュイ達の返事を聞く間もなく、私は泉から飛び出す。

水の精霊である私は清浄な水が必要です。

しかし泉の水を小瓶に入れて携帯することで少しだけ陸上でも移動することができます。

水の郷から旅立つ時、郷の人達がくださった若草色のマントを身に纏い、私は駆け出した。

そこは森の中、小川のほとりの広場でした。

戦士の男はオークの群れを相手に奮闘していました。

1対1ならば戦うことは容易いでしょうが、オーク達は集団戦闘、さらに弓を持つオークもいるため、攻撃をもろに受けてしまっている。

戦士は肩などに傷を負い、両手で片手剣を持ち、苦戦しています。助けなくては。そう思っても、あと一步のところで立ち止まってしまう。

精霊は、その姿を人に見られてはならない。

私の中でその掟は堅い楔となつて突き刺さっている。

それに私が助けに入ったことでどうなるのでしょうか？

精霊とはいえ私の力はたかが知れています。私も傷を負い続ければ消滅してしまいます。私が消滅したあと、あの泉は……。

精霊の力無しで成り立つ泉は少ない。余程強い精気を持つ泉も人間の開拓などで少なからず傷んでいるものが多いと聞きます。

「ぐっ！」

鈍い音。呻き声。オークの槌が戦士の頭をとらえていました。その身はねじれるようにふらつき、その場に倒れ込む。赤い、血が染み出す。

私は半ば我を忘れ、男のもとに奮迅の勢いで走る。オーク達は突然の闖入者に臆することなく、私に向かって槌を真一文字に振り下ろした。

ふと気付いた時には、オーク達の姿はどこにもなくなっていました。周囲がずぶ濡れなのを見ると、無意識の内に、水を操る魔法【ウィ・アクシズ】を唱えたようです。

強い呪文を唱えたため、体を強い疲れが襲う。

精霊が力を行使すと精力を消費します。精力は精霊が存在するための力でもあります。

「そ、そうでしたっ！ 大丈夫ですか!？」

男の息は荒く、頭から流れる血は小川に染み出し、下流に流れてゆく。

私はすぐ水属性の回復魔法【スプラシオ】を唱える。

右手から降り注ぐ青い光の粒が、彼の傷にしみこんでいきます。しかしすぐに、赤い血が光を塗りつぶしてしまふ。苦しみに呻く声が一層強くなる。

……力が足りない。【ウィ・アクシズ】を使ってしまったせいでしょう。

深い絶望がのしかかる。ここまで来て戦士一人助けることができないのでしょうか。

悲しみに打ちひしがれ、ぺたんとその場にへたりこむ。

泉番として、誰かの死に立ち会ったことはありません。

郷の人達には「それはとても大切なことなのよ」とは言われたけれど、心の中では理解出来ませんでした。

人な死ぬ姿など、見ない方が良いのではないのでしょうか。

カッソ。

その時、硬い感触が悲しみの中で響く。

懷から泉の水が入った小瓶がこぼれ落ちました。

……これを使えば……。

いや、それは間違っていることです。ここで私が消えればあの回復の泉は、誰の命も救えなくなってしまう。

一人を救うことで、泉を枯らしてしまうわけにはいきません。

新しい泉の水を取りに行こうにも、行っている間に死んでしまうかもしれません。

私は迷いました。この1日、彼は必死に戦っていました。それを無駄にしたくはありません。でも泉は……。

何が泉番ですか。泉番の仕事は、「泉の番をすること」ですか？

私はそんな泉番になりたくはないです。

小瓶の栓を抜き、それを男の口にあてがいます。

しかし、慌ててしまい零れてしまいました。

どうやらこのままでは、飲ませることは出来なさそうです。

……ならば。

私は意を決しました。背に腹は変えられません。

私は残っている泉の水を口に含み、そして男の口に、そっと自分

の唇を重ねていきます。

目を固くつぶり、外界からの情報を遮断します。目を開けた瞬間
気恥ずかしさで、どうにかなっちゃうでしょう。

水を含んでいるはずなのに、口の中が乾くような感覚がします。
でも後悔はしません。助けるためなら、この身を喜んで差し上げま
す。

ゆっくり目を開けると、男の傷は塞がり始めました。顔色が良くな
っていきます。私の口の中で精製された回復の水は彼の中で、効
力を発揮しているようです。

そして次第に私の体は光の粒子になって消えようとしていました。
泉の水なしでは私を成り立たせることはできないようです。

さようなら。名も知らぬ若者よ。あなたが目覚めたとき私はあな
たの目の前にいないでしょう。

あなたの命を救った者がいたことも、分からないでしょう。

それでいいのです。精霊は人の前に姿を見せてはいけないのです
から。

ふと思います。私はなぜここまでしてあなたを助けたかったのだ
しょうか。

精霊としての使命だからでしょうか。
それとも……。

私はそこで気を失いそうになりました。

気を失った一分後、私は完全に消滅するでしょう。

私の意識は最後の疑問を頭に残しながら、次第に暗くなっていき
ました。

そして、完全にブラックアウト。

月明かり。(前書き)

お久しぶりです。黒井蒼那です。

構想がまとまったのでこれから頑張りますのでよろしくお願いします。

月明かり。

暗蒼色の空を幾多の星達が舞い踊っていた。

あれはそんな日のこと。

「あの人」と肩を並べて星を眺めていた。いけないことと分かっているにも、この思いは堰をも破るようだった。

彼が私を見て、嬉しそうに語りかけている。よく聞き取れない。まるで深い海の底でしゃべっているようだ。

あの人はどうやら私の首もとを見ているようだ。

ああ、そうでした。確か、私はここで……。

せせらぎが聞こえます。水のゆらめきを感じます。濡れた草花の匂いを感じます。

そつと、目を開く。

見慣れた夜の森でした。広葉樹の隙間から差し込む月の光が夜露に濡れた青い花をスポットライトのように照らし出しています。

泉の水は月の光を受けて黄金色に輝いていました。光を薄く均したような光の膜が水の波紋に合わせて崩れます。

しかし視界を外に広げれば未だ夜。森の奥から淡い暗闇が流れてきます。

生きていました、おかあさま。私は、生命線ともいえる泉の水を瀕死の剣士に分け与え、そして消滅しました。

それなのに、私は……？

「目が覚めた？」

まるで歌うような声でした。驚いて声がした方を向くと、そこに

は今日何度も見た、そして消滅する間際に見た顔、私が助けた剣士がいました。

改めて見ると剣士は年端も行かない若い男でした。癖っ毛の目立つ栗色の髪のせいで余計にそう感じてまいります。

体つきも、騎士のようながっしりとした体つきではありませんが、その金色の目に宿る意志は光をい帯びています。

「いやー、びつくりしたよ。目が覚めたら傷は治ってるし、目の前にはこんな可愛い女の子が今にも消えようとしているんだもの」

「……私を、どうやってここまで、連れてきたんですか」
緊張して、るれつが回らない。

「ん？」

「わ、私はあと少しで消滅するところでした。あなたは、どうやって私をここに運んだのですか」

「……ま、何でもいいんじゃない？ 助かったんだし」

絶対に何か隠している、そう感じました。

助けてもらった恩があるので深く追及はしませんでしたが。

「……えっと、自己紹介がまだだったよね！ 俺はフィル。まあ見ての通り旅の剣士かな」

「……自己紹介なんてするつもりはありません。立ち去ってく」

「君はウンディーネだね？ ウンディーネの泉番」

ふいに放たれた言葉に私は言葉を失いました。

この人は何者なのだろう。なぜそんなことを知っているのだろう？ 遙か昔、人間と精霊の一族は共存関係にありました。互いが互いを認知し、交流を深めていたといえます。そしてその詳細な記録が人間の社会に残っているとも。

だからこのフィルと名乗る剣士が、私の資格好からウンディーネであると類推したのも分かります。

しかし、泉番という存在がウンディーネの中で確立されたのはつ

い百年ほど前で、その時はすでに人の関わりを絶っていたとも聞かれています。

なぜこの剣士は泉番の事を知っているのでしょうか？
ますますあやしいです。

「な、何？ その突き刺さるようなジト目。まあ嫌いじゃないけどね」

「嬉しそうに笑わないで下さい」

だって嬉しいんだもの。そうつぶやくと、フィルと名乗る剣士は泉の縁に腰を下ろした。

「ずっと思ってたけど泉の水ってすごいよね。道具屋でも売られてないような秘薬にも匹敵する治癒力。しかしその力ゆえに長期持ち歩くことができない。泉番であるウンディーネにはそれが可能なのかな？」

その通りです。ウンディーネは泉の水を長時間持ち歩くことができます。私たちが「水」の属性を持ち、泉の水と相互に作用しあうからです。口には出しませんが。

「……そ、そうだつ、君が俺のこと助けてくれたんだよね。」

フィルは、淀みない動作で立ち上がると深く腰を折り曲げ、

「ありがとうございます。貴女は命の恩人です」

そうお礼を言っただけで緩やかに笑いました。その所作はとても流麗で、そして少し可笑しかった。

「律儀に謝っても何もしません。私は使命を果たしただけです。今にも死んでしまいそうな剣士を助けるのも私の仕事です」

私は皮肉も込めて氷水のように冷たく言い放ちました。

しかし、フィルは 予想外に穏やかな顔をしていました。

「なんかいいね、その心構え」

「は？」

言葉が返せませんでした。

「いや、そういうの良いなって思っちゃって。今の人間の世界って政治も経済も宗教もみんな利己的な考えが広がってる。そう思うと

ウンディーネや他の精霊達の考え方はとても新鮮に見えてくるんだ。

「フィルは遠くを見つめながらそう語りました。

……もうだめです。こらえられません。」

「ぷっ、ふふふ」

「えー、まさか笑われるとは思わなかったよ」

吹き出してしまった私を見て、呆れたように笑う。

「す、すいません。急に変な話を始めるのでつい」

「へ、変な話……だと……」

フィルはがっかりした様子でその場に寝転びました。着衣が乱れ襟からインナーが覗きます。

赤面するより早く、私は私はフィルの胸に飛び込みました。

「のわっ!？」

「教えて……ください」

「な……何を？」

急にこんなことを聞くのはどうかと思いますが、今聞いておかなければいけない気がしました。

「その……」

「ペンダントは何ですか？」

「ん？　これが気になるの？」

フィルは拍子抜けした顔で首からペンダントを外しました。

ペンダントは透明な水晶のような素材で造られていました。二枚貝を模したデザインで、今にも潮騒が聞こえてきそうです。

似ている……。

「あの、これをどちらで？」

「どこって……、この森の近くの「馬車の町」だけど
「町……そうですか……」

この回復の泉は森の中心に近い場所にあります。

「馬車の町」へは距離があります。

「……行きたいのかい？」

「ええ……まあ」

「うーん、その小瓶に入れた水でどれぐらい活動できるかい？」

「……行き帰りできるくらいしか時間はありません」
「そうか……」

フィルは思案顔で考え込むとポンと鼓を叩いた。

「よしっ、じゃあ行こう！」

「はい？」

舞い踊る風。

「な、何をするつもりですか？」

急に私を引っ張りだしたフィルに慌てて訊きます。

フィルはニコニコ顔のまま私を引っ張っていきます。

泉から離れるにつれて、体に少しずつ変調が現れはじめました。

小瓶に入れた水が濁りはじめます。

この水が真っ白になったとき、私は消滅する。この人は気づいて
いるのかしら？

連れてこられたのは森の中に設けられた野营地でした。今使つて
いるのは彼だけのようで、柔らかそうな布でテントがこしらえられ
ています。

「な……何をするつもりなんですか」

このままテントの中に連れ込まれるのかもしれない。そして……。
考えた瞬間、体が強張るのを感じました。

もしそうなら、許さない。私は密かに魔法を唱えはじめました。

「……じゃあ目を閉じてね」

フィルいたずらっぽく笑んだ。

「いやです」

精一杯の鋭い目でフィルを睨む。目を閉じた瞬間何をされるか分
かったものじゃない。

「……俺、けっこう信頼されてないね……まあいいや、目あけたま
まで。せめて手は握ってて」

私の手を強く握りしめると、空を仰ぎ見ました。
そして奏でるように唄いはじめたのです。

「歌うは羽の眷属たち。奏でるは異国の調べ」

それは呪文をより強固にするために唱える詠唱文。

「主の歌に集い、道標の杖となれ」

次第に、周囲でつむじ風が起こり、薄緑の光を帯び始めます。

「あのっ……あなたは一体」

「しゃべらない方がいい」

そして最後の唄を森に響きわたらせました。

「【ストレイフィン】（旅人の風歌）」

瞬間、大地の底からきたかのような突風が吹き上がった。

「……目をあけてごらん」

結局、目を瞑ってしまったようです。みたところ体におかしなところはありません。

しかし周りの景色はおかしくなっていました。

それには、街が広がっていたのです。目の前には多少あれているものの煉瓦づくりの目抜き通りが伸びていました。

通り沿いには露店が立ち並び、客をよびこんでいます。

行き交う人々は荷馬車に大量の荷物を積んだ商団、隣国への遠征が戻ったらしい騎士団。夕食の食材を求め歩く女たち。実に様々です。

たくさんの人の生気で満ちていました。

騎士団の列がぼーっとしている私たちを迷惑そうに避けて通り過ぎてゆきました。

「あの、これは……？」

「「馬車の町」へようこそ」

やはりここが西方の宿場町であり、「青い花の森」から一番近い町、「馬車の町」なのかしら。

……そうだ。

「あの……あなたがさっき唱えた呪文は……」

「やっぱりばれちゃったか。そうだよ、あれは風の精霊「シルフ」の力を借りた転移魔法だよ」

信じられない。シルフは国の北方にある「風車山脈」を聖地とす

る、風を操る精霊です。

なぜ彼は精霊の力を……？

「あなたは、まさか……」

「ばれたくなかったんだよなあ……そうだよ。俺は」

「風の「リンカー」なんだ」

リンカー。(前書き)

ども黒井蒼那です。

10日振りの更新です。すいません。

いろいろ忙しかったです。

それではどうぞ。

リンカー！

「さて、じゃあ探そうか」

「……何をですか？」

私がキヨトンとしていると、フィルは、胸元から見慣れた首飾りを取り出した。

そうでした。私が大切にしていた首飾りによく似ていると思い、つれてきてもらったのでした。

周りの人の波に、全部流されていつてしまっているようです。

「確か北通りに店を構えてた宝石商だったと思うけど。じゃあいこつか」

「はいっ」

「大丈夫？」

フィルは心配そうにひざまづいている私にしゃがんで手をさしのべてきた。

「だ、大丈夫です…… すいません。誰かの足を踏んでしまったようです」

「少し休もつか」

精霊は肌の色が少し、その属性の色・・ウンディーネなら青、シルフなら緑がかかっている以外は、人間と同じように見えますが、実は本質から違っています。

よって疲れることはありません。しかし、慣れない環境下では疲れに似た感覚を覚えることがあります。

今がまさにそれなのでしょう。

人混みから離れ、近くの広場に入ります。

「す、すみません……」

「気にしなくていいよ。ティアの気が赴くままに」

フィルは朗らかに笑うと、人差し指で空間をなぞるように、複雑な文字列を描き始めた。

恐らく風の契約印だ。^{コイルナバー}術士や、強力な精霊が用いるといわれている。

なぞった文字列が光を帯びながら浮かび上がる。

「……」

何が起こるのかと、目を見張った。

ぱわん！

光が収束したかと思うと情けない効果音とともに爆発（？）した。

現れたのは、緑色の羽が生えた、ちっちゃい猫。

「こいつらは俺の眷属、ピクシー」

くるっと丸まった尻尾。透き通った目。蜻蛉のような羽。か、かわいいらしい。

「あ、気に入った？」

「え、ええ」

「そいつは良かった。そいつらがいれば、少しは気分が安らぐだろ」

ピクシー達は私の周りをくると周りながら恐らく猫の鳴き声ではないコトバを放ち始めた。

「……リンカーはこんなこともできるんですか？ まるで本物の精

霊みたいにチカラを使う……」

「……俺は最低でも肉体の26%リンクしている。これくらいお茶の子さいさいだよ」

リンカー。

その存在は精霊よりも秘されてきた存在だ。

リンカーとは名前の通り、精霊に「浸食^{リンク}」した人間のこと。

リンカーになった人間はその浸食率に応じて精霊の力を使うことができる。

先天性、奇病による発現が多いが、精霊に接触することでも発現する。

「べ、最大^{ベストリンク}浸食は？」

「47%」

言葉が、出ない。

26%でも、かなりの浸食率です。眷属を呼び出すことは容易い。しかし47%は高すぎます。

浸食率とはつまり、肉体の何%を精霊に浸食されているかで決まり、リンカーの状態により変動します。

つまり、ファイルは肉体の半分を精霊化できるということ。

並大抵のリンカーでは無理な浸食率です。

「さて、そんな話はやめてやめて。探しにいかうか」

私の背にピクシーが舞い降りる。

時間はまだある。私はよろめきそうになりながら立ち上がった。

「この通り、ですか……？」

「そうだよ」

ファイルの案内に従って着いたのは、建物と建物の間、薄暗い路地でした。

麻布を敷いただけの露店。売っているものには統一感がなく埃をかぶっているものもあります。

「まあちよつと見た目は悪いけど、売っているものはそんなに悪くないよ」

「そ、そうですか……」

リンカーとはいえ、未だ信頼できない。

ピクシーは彼を信頼しているようだけでも。

「おつかしいなー。確かにここで買ったはずなのに」

目的地には、サケと呼ばれる液体を売る老人がいるだけでした。

「ここにいたはずなんだけどなー」

「儂は知らん」

あまり友好的ではない老人の反応を気にすることなく話し続ける。やはり見つからないようです。簡単に見つかるとは思いませんでした。

フィルはまだ何か老人と話こんでいるようです。

「まだ、終わらないの」

いう前に、私の視界は黒い影によって隠されてしまった。

「まちなよ。嬢ちゃん」

息切れがする。足が氷のように冷たく堅くなっています。

背後からは怪しい風貌の男たちが数名迫ってきます。

「かつ」

ついに足がもつれ、前のめりに転んでしまう。

それだけじゃない。次第に意識が朦朧としてくるのを感じます。

「やつと毒がきいてきたか」

にやけながら、男たちは近づいてきます。息切れが一層激しくなります。

「この女、変なカラダしてるな。なんか綺麗だ……」

「おい。あんまりいじるなよ。大事な商品なんだから」

体から力が抜けていく。痺れるような痛みが染み込んできます。連れ去られた後、何か液体を飲まされた気がします。

人間に効く毒なのかもしれません。しかし水の精霊の体に異物が入ってしまったら、何が入ろうと毒に変わりがないのです。

「でもちよつと位はいいでしょ？」

「産ませるなよお？」

いやしい笑みを浮かべた男の、泥まみれの手が迫ってきます。

「そんな汚い手でさわるなよ」

刹那、疾風のような声が鳴りました。

「だ、誰だ？」

辺りを見回す男たち。

「ここは街の人間でもたどり着くのが難しい場所だぞ？」

「どこにも姿が見えない……」

「ティア。聞こえるかい？」

「は、はい！？」

「もう少し待っててくれ。すぐに助ける」

そしてすぐに、空間全体を包み込むような詠唱。

「歌うは羽の眷属、奏でるは迷い人の歌」

「正しき風よ、迷いの森の中を導け」

「【サーバントセイル（従いし帆船）】」

背後で激しい発光。

驚いて振り返ると、ピクシーの身体からこぼれるように光が満ちてきました。その光が辺りを包み込んだ後。

私の目の前には、一人の剣士が立っていました。

「挨拶がわりだよ。【スラストフィン（風の牙獣）】！」

フィルは鋭角的に手を振っていました。その手から、空間を裂くような風が放たれ、男たちを切り裂いた。

「ぐわっ！」

切られた箇所を押さえ、うずくまる男たち。

それを確認したフィルはため息をつく、私に向かって笑いかけました。

「ピクシーが君の場所を教えてくれたからね。彼らをゲートに使う移動もできるんだ」

「まあ、何はともあれ、……遅くなってごめん。助けに来たよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6538n/>

泉番のウンディーネ。

2010年10月17日22時40分発行